

応用気候学→軍用気候学 1951年にアメリカ気象学会から出たコンペンディウムの中に、ランズバーグとジェイコブが書いた「応用気候学」はスタイルはよいし結構な論文であった。正直なところ読んでいて、均整のとれた美人でも見ているようにちょっと感心した。しかし、よく見つめると、思想を持ち合せていない顔カチだけの美人のように思われて来た。

と云うのは、無造作に書かれている幾つかの言葉によってである。例えば、戦略爆撃の航空路を決定するのは長距離の商業航空路の場合と同じ問題であるし、戦車など軍用車の運行情度 (soil trafficability) と、大農場の農耕や土木工事で使うブルドーザー・トラクターなどの運行情度とは、同じような天気の影響を受けると云うのである。しかし、兵器とは、一般に高級品でぜいたくに設計され、いわばある特殊の社会機構の下に使用される製品である、だから、そういう違った条件下のモノの活動に、「天気」が同じように影響すると云うのはおかしい。戦争は決してビジネスではない、とにかく、文中示さに富むので、さまざまな事が思いつく。例えば下駄ゾーリの気象象学的調査、雪駄の形態と雪密度との関係の研究など、我々がぜひしなければならぬ。だが、短靴や長靴の研究がそのまま軍隊靴の研究になるのはゴメンだし、くり返して云うが、理論的にもなるべき筈がない。

"予報の仕事はその経済効果を基本として考えなければならない。たとえば予報による災害防止にしても、ある種の災害は土木工事に莫大な経費を注ぎ込めば殆んど防げるかもしれない。然しそれは国の経済力が許さない。そうすると或る程度の災害を覚悟して、予報に投資することによってどこ迄災害を軽減しうるか、両者のかね合いにおいて最も経済的な点を求めることが予報を考える場合の先決条件である" と。これはO氏からきた卓見であり、従来の気象事業にはこのような最も基本的な考え方が欠けていたのである。しかも、上の問題の統計的処理法はめどがついているというのである。

しかし私はここでより根本的な問題に突き当たった。第一にこのような基本調査の基礎資料が整備されておらず、でたらめであるということである。一例をあげれば災害統計の如き補助金行政、即、陳情行政のために事実の数倍はおろか数十倍の数字が公式報告されることが珍しくない。第二に上のような考え方が正当に評価されるような行政が行われていないということである。ほう大な土木予算の相当部分がリポートであることが常識であるような行政、建設大臣の選挙区の土木予算が優先するような行政においてはO氏流の科学的行政の入りこむ余地はない。科学を愛するならば科学が役立つ場を作ることに努め、それが科学を愛する考の態度である。(K<sup>2</sup>)

麦の黒穂はなぜなくなるらないか? 収穫期の麦の穂に黒い団子をつける裸黒編病の菌は、種子を47°Cの湯湯につけて消毒すると死滅する。それで種子を風呂場につけて消毒することは広く行われているが、黒穂はいっこうにへってない。これは消毒の温度が高すぎると種子が発芽しなくなるというので、低い温度で消毒するから、その効果が完全でないためである。47°Cでは発芽力がそこなわれるはずはないのだが、実際は湯の温度を47°Cにしよとすると失敗するのはなぜだろうか。温度計が狂っていることも稀にはあろう。しかし大部分は薄暗い風呂場で温度を測るので、目盛りを読むのに手間取り、甚しいのは風呂の湯から出した温度計を、明るい電灯の下に持って行く間に、水銀粒が下ってしまうからで、温度計が47°Cを示した時には、湯の温度は47°Cを遙かに越していることが多い。このような高温の湯につけるのだから、種子の発芽力がそこなわれるのは当然である。それで消毒のやり方を指導する時に、温度の測り方を細かく注意することが必要である。しかし農業気象を本当の農業技術とするためには、球部にゴム管をかぶせた温度計や、体温計式の最高温度計のような、特殊の消毒用温度計を作るといった配慮がたいせつである。

(A.M.)



気象学におよぼす天気の影響 自殺や犯罪はもちろん、家庭では夫婦げんか、職場ではオヤヂの気嫌にだってお天気は影響するらしいから、学間にも影響するだろうか? などといまここでいうんじやない。ほかでもないこの雑誌「天気」のことです。最近、地方を廻ってみて感じたんですが、この「天気」は大して注目されてません。はっきりいえば、こんな雑誌はあってもなくてもいいんですよ。これじやだめだ。なんとかもつと、よくしたいと思います。そこで一つ考えました。ドイツの Meteorologische Rundschau のうしろについているような簡単な文献紹介をやったらどうかと。アメリカで出している Meteorological Abstract and Bibliography には、イギリスの学者も応援しているし、広く共産圏の文献も紹介されていてありがたい。日本では経済的な理由であればほどまではむりと思うけど、出来るだけやったらどうでしょう。以下に希望を書いてみます。(1)気象学全般にわたること。これには各研究グループが中心になったらどうですか。(2)外国ばかりでなく日本のにも主力を注ぐこと。(3)報告・調査・資料も紹介すること。(4)その所在場所を明記すること。以上です。もしこれがうまくゆけば、日本の気象学の進歩に天気は偉大な影響をあたえると思うがどうでしょう。(mlk)